ならぬと云ふ。神には「何處」もなく「何時」もなく又「何」もない。それは「名を有せざる無」であり「無形態の形態」に過ぎぬと云ふのである。唯彼れの思想は基督教思想の特徴として佛教に於けるが如く自我の否定にまでは進まなかつた。そこでは自我は神のうちに攝取せられるけれども而もなほ所謂「靈魂の火花」によつてそれ自身を自覺することができると考へられたのである。

かく神話的宗教的意義の發展は直觀的事物的なものから漸次に觀念的精神的なものへ向つたと云ふことができる。これは言語の發達と符を合する如くである。啻に符を合すると云ふに止らず言語觀と宗教觀とは歴史上に於ても亦密接な關係を以て發達した。エックハルトは萬象を神の言葉に譬へ、この考は後にバアクレーの認識論にさへもその著しき影響を及ぼした。* ハマンは彼れの基督

* Eckhart, Ausg. Pfeiffer II, 92 u. ö.; Berkeley, A treatise concerning the principles of human knowledge, Introd. § 21-24.

信仰は記號の問題に終始すると云ひ、ヤコービは言語も宗教もその起源は共に超感性的なものを感性的に、感性的なものを超感性的に把握するところの同じ一つの情意活動によると說いた。* この問題は實に象徴形式の哲學に對する一つの重大課題であると云はなければならぬ。素より象徴形式の哲學は兩者に共同的な根源を見出し得るか否かを問題とするものではない。それはどこまでも兩者の構造の同一性、機能の同一性の問題に始終する。而して若しそこにかゝる同一性が存するとすればそれは唯兩者の象徴的表現の方向に於てこれを求めうるに過ぎないであらう。而してかゝる方向の內的法則に關する體系的知識を獲得することこそ實に象徴形式の哲學に與へられたその重大任務であると云はな

* Haman, Schriften, hg. von Roth, II, 261; V, 278; vgl. R. Unger, Hamanns Sprachtheorie im Zusammenhange seines Denkens 1905; Hamann und die Aufklärung 1911; Jacobi, Ueber eine Weissagung Lichtenbergs, Werke III, 209.

ければならぬのである。

言語發達の初期に於ては語音はその內容を兩者の直接的類似若くは尠くとも何等かの具體的對應によつてのみ表はすことができる。從つてそこには記號と意義との眞の對立は認められない。兩者は共に感性的物的な存在の世界に屬しこれを結合する紐帶も亦この同じ世界に屬するものと考へられてゐる。神話的意識の表現たる神話的形象も亦その初期に於ては全く同樣の關係に於て成立する。素より如何に原始的なる表現と雖もそこには未來に於て發現すべき分離の傾向を萠芽的に含有せざるものはないとも云へる。何となれば神話的形象が成立するためにはかの聖なるものと俗なるものとの對立はその缺くべからざる前提と云はなければならぬからである。併しながら兩者の區別はそこではなほ頗る不安定たるを免れぬ。如何なる經驗も單にそれが特異的であると云ふ理由によつて聖なるものとせられ呪的な力の表現と考へられる。而も表現はそのまゝ

力であり記號は實物と區別せられない。そこには唯存在的であると同時に價値的である一樣的な層が認められるに過ぎないのである。然るに神話も言語も共に永くこの擬態的記號の段階に止ることができない。次の段階に於て記號とその意義とは類推によつて關係付けられる。兩者はなほ何等かの具體的關係を保持するが、而もそこでは兩者の判然たる區別が意識せられるに至るのである。記號は意義を表現し感覺的印象は精神的內容を代表する。換言すればそこに allegoria(語源的には他を說くこと)的關係が成立するのである。中世の基督教思想は實にかゝる他說的解釋の時代にあつたと云ふことができる。彼れらは解釋を細分して historisch, allegorisch, tropologisch 及び anagogisch の四種となした(或は litterale, allegorico, morale, anagogico)*。このうち第一は單なる經驗的事實の叙述に過ぎないが他は凡てこの他說的意味を有するものである。

* Dante, Convivio, trattato secondo, cap. 1.

これらの用語を日本語に譯することは無意味であるが、強ひてこれを意譯すればAllegorieは類喩とも云ふべく同種のものによる比喩であり、Tropusは轉喩とも云ふべく異種のものによる比喩である。而してAnagogieは聖喩とも云ふべくそこでは常に聖なる神或は聖なる教會の事蹟が引用される。併しながらこれら何れの場合に於てもそれらは凡て一般的なものを個別的直觀的なものによつて理解せんとする傾向にあると云ふことができる。然るに神秘主義に至つてこの傾向はその方向を一變した。彼れらは時間的一回的なるものを永久的なものによつて理解せんとする。彼れらは宗教的過程からその單なる歴史的内容を剝奪せんとする。從つて救濟の過程の如きも精神の深淵に於て何等の媒介をも必要とすることなく、唯我と神及び神と我との直接的相關のうちに完成せられると考へるに至つた。かゝる見方に於ても直觀的世界はやはり精神的なものゝ記號であり比喩であるとせられるのであるが、併しそれはもはや絶對者の個別

的啓示ではなくむしろ全體としての自己啓示である。啓示は唯世界の全體のうちに於て又人間精神の全體のうちに於てこれを認めうるに過ぎないとせられるに至つた。

我々はこゝに宗教的思惟が到達しうる象徴に關する最高の理解に當面する。これ以上の發展はもはや宗教的思惟の領域を超越しなければならぬ。事實それは近代理想主義の哲學によつて初めて完成せられた。ライプニッツはその「眞なる神秘的神學に就いて」なる論文に於て彼れの象徴説と神秘主義との關係を告白し、凡ての個別的存在は神の足跡であると云ふエックハルトの言葉を引用してゐる。* 彼れは吾人の自我には無限性がある、神の全知全能の足跡と肖像とが結合してゐると云ひ、そこから出發してかの豫定調和の世界觀を展開した。かゝる調和は如何なる因果關係にも亦如何なる個物の相互作用にも依存するも

* Leibniz, Deutsche Schriften, hg. von Guhrauer, 1838, I, 411.

のではなく、實にこの神と自我との原本的對應によつて決定される。凡ての單子はそれ自身獨立的であり完結的である。而してかゝる獨立性完結性によつて宇宙の生ける鏡となることができると說いた。こゝでは單子は神の完全なる象徵と見做される。從つてそこには如何なる偶然もなく「奇蹟」もない。何となれば豫定調和と云ふ一般的な「奇蹟」が偶然と云ふ個別的な「奇蹟」を解消して了ふからである。* 彼れは自然は奇蹟に滿ちてゐる、併しそれは理性の奇蹟であるとも說いた。** かくてライプニッツに至つて初めて象徵と理性との完全なる綜合が確立されたと云ふことができる。我々は今詳說する暇を有たないが、そこから更らにシュライエルマッヘルの宗教哲學が發生すると云ふ事實を見逃すことができない。

* Philos. Schriften, hg. von Gerhardt IV, 557.

** Oeuvres, publ. par Foucher de Careil I, 277.

シュライエルマッヘルによれば宗教とは凡ゆる個物を全體の部分と見、凡ゆる有限を無限と云ふものゝ表現と見ることである。而も全體と云ひ無限と云ふのもそれは單なる空間的分量的な意味に於てゞはない。法則のうちにのみ自然の宗教的意義を見出すことができる。奇蹟と云はれるものも實はかゝる宇宙的法則に對する記號に他ならぬ。凡ゆる事件はそれが宗教的見地から重要である限りこれをその記號と云ひ奇蹟と云ふのであると說かれた。* 初期の神話的宗教的意識にとつて記號は客觀的實在的であり、或は神によつて直接的に働かれるもの卽ち Mysterium であると考へられた。** 然るに今や我々は記號に關してこれとは全く對蹠的な立場に導かれたのである。何となれば宗教的に重要なるものはこゝではその內容とは無關係であり、全くその形式に規定されると考へら

* Reden über die Religion, Zweite Rede, Jubil.-Ausg. von Rudolf Otto, 33, 47, 66.

** Harnack, Lehrbuch der Dogmengeschichte³ I, 198.

れるからである。神話的宗教的意識の發展は實にかゝる對蹠的な二つの立場の消長に他ならぬ。而してかゝる力學的律動のうちにそれは多くの異る宗教的形態を構成して行つた。然るに記號に對して、象徴に對して、意味と直觀とはその不可缺なる構成要素であると云はなければならぬ。從つて如何に原始的なる神話形態と雖もそこに意味的契機を包含せざるものはない。かの聖なるものと俗なるものとの根本的對立なしには如何なる神話的形態も成立することはできないであらう。一方最高の宗教的眞理と云はれるものも亦常に感性的存在と結合してゐる。何となれば眞理はかゝる表現の手段なしにはそれ自身を具體化しその力を實現することを得ないからである。プラトンは理論的認識についてゞはあるが、一が多となり又多が一となる過程には始めもなく終りもない。それは人間的思惟の本質として過去現在未來に亙つて變ることがないと說いた。これと同樣に意味と直觀との不斷の交涉は凡ゆる宗教の根本的規定であると云はな

ければならぬ。かゝる交涉こそ宗教的活動を推進せしめる內的緊張である。この緊張が解消して二つの力がその平衡狀態を獲得するとき、我々はそこにはもはや宗教的活動の如何なる發展をも見出すことができないであらう。

昭和十六年七月五日印刷
昭和十六年七月十日發行

(特)定價金壹圓六拾錢

譯者　矢田部達郎

發行者　東京市神田區錦町三丁目一一番地　山本慶治

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地　金子祐

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地　大日本印刷株式會社

發行所　東京市神田區錦町三丁目　培風館
振替東京三二六一七
電話神田三七七四

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九　日本出版配給株式會社

カツシラアヤ神話奥付

矢田部達郎譯

カッシラア **言語**

——象徵形式の哲學第一——

B6判二一七頁
洋布裝函入
定價 一圓八〇錢

カッシラア **認識**

——象徵形式の哲學第三——

B6判頁未定
洋布裝函入
定價未定

（九月上旬刊行豫定）

培風館發行

920
12

終